

エコノミスト 360° 視点



渡辺 博史 国際通貨研究所理事長

G20には中長期の視点が欠けている

6月末に大阪で開かれるG20サミットに先立ち、5月末に東京でT20の2019年最終会合が開催された。という方も多くの方は「T20って何?」という印象であろう。

もともと財務相と中央銀行総裁の所管事項を対象としていたG20会議は、08年のリーマン危機に対処するため各国首脳によるサミットに引き上

げられた。それ以来「20」と名づけた関連会合がビジネス、労働、女性、若者などの個別事項を議論する場として設定された。その一つであるT20は「Think20」、すなわち世界各国のシンクタンクが集まって議論する場だ。12年から毎年開かれている。

T20が他の会合と違う特色

の一つは特定の分野を対象にしていることだ。G20は「明白かつ現在」の問題に対応する短期的な政治的判断をする場だ。しかも数年前からは決定力、合意形成

力に欠け、共同声明もまとまりにくくなっている。

組んでいるのは、膨大なデジタル取引に対する課税制度について20年までに合意するという堅実な課題だ。一方、T20では今後高齢化が進む途上国も含め、個人資産や年金にかかる課税が一層の所得不均衡をもたらさないようにする枠組みを提言していることだ。

G20は「明白かつ現在」の問題に対応する短期的な政治的判断をする場だ。しかかもう一つの特徴は、世界が直面している課題全体を広く扱っている。もう一つの特色は、中長期的な視点から問題を分析し、今後数年間あるいは10年間といた長期の政策決定の方向感をなくさないようにする枠組みを提言していることだ。

G20は「明白かつ現在」の問題に対応する短期的な政治的判断をする場だ。しかしもつて、もともとの提言に立ち返ることで、時宜にあつておけば、もし事態に変化が生じても、もともとの提言に立派に反映されるべきである。

言葉のお化粧で合意を繕つてりにくくなっている。

財政金融分野でG20が取り組んでいるのは、膨大なデジタル取引に対する課税制度について20年までに合意すると

もう一つの特色は、中長期的な視点から問題を分析し、今後数年間あるいは10年間といた長期の政策決定の方向感をなくさないようにする枠組みを提言していることだ。

G20は「明白かつ現在」の問題に対応する短期的な政治的判断をする場だ。しかかもう一つの特徴は、世界が直面している課題全体を広く扱っている。もう一つの特色は、中長期的な視点から問題を分析し、今後数年間あるいは10年間といた長期の政策決定の方向感をなくさないようにする枠組みを提言していることだ。

た政策を考えるとしても、どこに力点を置くか、国民の意識に基づいているか、どれだけ定したりといった不毛な議論に陥ることを避けられよう。

G20には国際社会のため

言葉のお化粧で合意を繕つてりにくくなっている。

も、誤解に基づく同床異夢に終わる可能性が高い。

こうした反省に基づき、議論は「エビデンス(根拠)」「リサーチ(研究)」に立脚すべきだ。それぞれの立場、視点、世界観に基づいて見解の違いが生じるのは当然だ。

言葉のお化粧で合意を繕つて

に力点を置くか、国民の意識に基づいているか、どれだけ定したりといった不毛な議論に陥ることを避けられよう。

G20には国際社会のため

資金がかかるかといった点で

判断に差が生じるのも当然だ。最終的な政策提言にあたってはそれぞれの論点についてどんな評価を下し、どのように組み合わせたかを後から検証できるように、きちんと記録しておかねばならない。

こうした記録を正確に残し

た政策を展開できる。最後の政策判断を巡って相手に丸のみを強要したり、結論を全否定したりといった不毛な議論に陥ることを避けられよう。

G20には国際社会のため

の利害を優先して事を運ぼうといふ指導者が出てくるかも

しない。だがT20はおむね合意できる方向感を示し、短期の状況判断をすり合わせて提言していく。これがG20に欠けている部分を補おうとする試みである。

た政策を展開できる。最後の